Osaka University Knowledge Archive

Title	ランボーのカリカチュア的技法 : 科学用語の使用を中心に
Author(s)	山本, 健二
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 121-133
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54399
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ランボーのカリカチュア的技法

── 科学用語の使用を中心に[1) ──

山 本　健 二

キーワード：アルチュール・ランボー／カリカチュア／19世紀科学

政体がめまぐるしく変化し、急速に経済が発展していく激動の19世紀フランス社会において、自然科学の発展は文学創造にも大きな影響を与えた。そして、この影響は19世紀後半の詩壇を代表するアルチュール・ランボーの詩作品にも現れている。科学を楽しく学ぶ「科学の通俗化（vulgarisation scientifique）」という風潮のもと、ランボーが通俗科学雑誌等を通して科学に関する教養を養い、そしてその影響が詩編に現れているということは、中地義和が指摘する通りである[2)]。ランボーの科学に対する好奇心が表明されている、友人エルネスト・ドラエーに送られた1875年10月14日付けの書簡は注目に値するだろう。

> ちょっとしたお願いがある。現在の理科の「バショ」の学科試験は何々か―正確かつ簡潔に教えて欲しいのだ。古典的分野や、数学や、その他いろいろあるだろう。―それから、数学や物理や化学等の各部門の、取らねばならぬ必須点も言ってほしい。[3)]

ランボーが科学用語を多用していることから、詩編と科学に関する研究は既に存在するのではあるが、解剖学用語や医学用語が詩作に用いられる時、それが19世紀の文化的背景に置き直され考察されることは、ほとんどなかった。本論文では、このような科学用語の使用によって描き出される詩的イ

メージや、初期ランボーの技法を分析し、19世紀フランス社会において、彼の詩作品にどのような意味があったのかを考えて行きたい。

1. 初期韻文詩にみられる詩人の医学・解剖学用語に対する愛着

先に述べたように、ランボーの初期韻文詩には科学用語が頻繁に現れ、その中でも詩人が好んで用いた語は解剖学用語や医学用語である。その典型的な例を見てみよう。

水から立ち現れるヴィーナス

ブリキでできた緑色の棺桶から上がってくるかのように
こってりとポマードを塗り付けた茶色い髪の女の頭が
古ぼけた浴槽から、のろのろと間抜け面して立ち現れる
全く下手に手入れされた身体的欠陥を伴って

そして、脂ののった灰色の首、ぐっと張り出している
幅の広い肩甲骨、へこんだり突き出したりしている短い背中
それから腰の丸みは、はちきれんばかりだ、
皮膚の下の脂肪は平らな葉っぱでできているかのように思われる。

背骨は少し赤らんでいる。そしてどこをとっても
奇妙なことに、おぞましい臭いが発散させられている。とりわけ
奇抜な部分が注目に値し、拡大鏡を使って見なければならない。

腰には次の二文字が刻み込まれている。「輝けるヴィーナス」
そしてこの体全体が揺り動かし突き出す巨大な尻には
肛門の辺りに潰瘍ができ、身の毛もよだつほどに美しい。[4)]

タイトルが示すように、詩人は海の中からヴィーナスが誕生するという、絵画に頻繁に取り上げられるテーマを選んでいるのであるが、詩の中に現れる「ヴィーナス」は「棺桶」を思わせる「浴槽」から立ち現れる「娼婦」なのである。詩の語り手は、視線を「娼婦」の「髪の毛」から「首」、「肩甲骨」、「背中」、「腰」、「背骨」、「腰」、そして「娼婦」の最も醜い部分である「肛門」へと、上から下へ垂直に動かしている。一見したところ、愛と美の女神であるヴィーナスを醜悪な姿をした「娼婦」として描き、「ヴィーナス（Venus）」と「肛門（anus）」とが脚韻関係にあることから、「古典美学」をパロディーにしていると考えることができるのであるが、奇妙な身体をした娼婦の体を「拡大鏡を使って見なければならない」と語る話者の姿に、「性病」（「肛門の辺りに潰瘍」）を患った娼婦の身体を診察する医者や法医学者の姿を読み取ることができるのではなかろうか。

19世紀半ばから性に関する犯罪が増加することによって、性犯罪が行われたことを「解剖学」を用いて立証する方法が発達した。その方法とは、被害者と加害者の体に残ると考えられている痕跡を調べ上げ分類し、身体各部の形状・外見についての細かい記述、最先端技術であった顕微鏡を用いたミクロレベルの観察であったという[5)]。この時代背景は、この詩編の解釈にも関係するのではなかろうか。詩の語り手は、第一カトランで娼婦の「頭」を、そして第2カトラン以降では「首」から臀部へかけて、身体の各部分の特徴を順番に観察している。そして第1テルセでは「『拡大鏡』（loupe）を使って見なければならない」と、当時の「解剖学」的側面を思わせる表現を指摘することができる。

この詩編のような医学・解剖学用語の多用は他の詩編にも見られる。次の引用は「座った奴ら」と題された韻文詩の冒頭2詩節である。

潰瘍で黒くあばた面、目の回りには緑の縁取り、
こぶだらけの指は大腿骨の辺りでこわばっている
漠然とした邪険さが張り付いた頭頂部、

古ぼけた壁の癩病の花盛りだ

癲癇性の愛のうちで、彼らは異様な骨組みを
椅子の黒々とした大きな骸骨に移植してしまった
骨軟化症の横木の辺りで、あいつらの足は
朝も晩も絡まり合っている。[6)]

この韻文詩も「水の中から立ち現れるヴィーナス」と同様に、「座った奴ら」の人物描写によって始まる。この詩編では「目(yeux)」、「指（doigts)」、「大腿骨（fémurs)」、そして「頭頂部（sinciput)」と、身体の各部分について言及されるのであるが、とりわけ読者の注意を引きつけるのが、専門用語の列挙である。現代ではハンセン病として知られる「癩病（lépreuse)」、医学用語として使用される動詞「移植する（greffer)」、脳疾患の一種「癲癇（épileptiques)」、骨格が変化する病気「骨軟化症（rachitique)」を挙げることができる。さらに、テキストに特殊性を与える要素として、耳慣れない語が使用されている。第1ストロフの「こぶだらけ」と訳した語は、原文では « boulus » と書かれており、グランロベールやトレゾールには1865年にバルベー・ドールヴィイーが既に使用した方言として定義づけている。また同じストロフ内の「邪険さ」と訳した語 « hargnosité » は、辞書には存在しない語、つまりランボーによる造語が使用されているのである。わずか4行の詩節内に、標準的な語彙だけでなく、方言という異なるレベルの語彙や、辞書に存在しない語などをも混在させ、初期ランボーの詩作における特徴が現れている。

「座った奴ら」における医学用語、病名、そして方言や造語について分析してきたが、この冒頭2詩節には、植物のイメージが「座った奴ら」を描写するために用いられていることを見過ごすわけにはいかない。「椅子の黒々とした大きな骸骨」や「骨軟化症の横木の辺り」という表現には、「座った奴ら」が腰をかけている椅子の骨組みと理解することができ、また「あいつ

らの足は／朝も晩も絡まり合っている」という箇所には、植物が植木鉢等に備え付けられている添え木につたを絡めているイメージが投影されていると考えることができる。もちろん第1ストロフ4行目の「花盛り（floraisons）」という語も植物のイメージを付与するのに役立っている。つまり、詩人は「座った奴ら」に「植物」のイメージを与え、彼らをグロテスクに描き出しているのである[7)]。

ここまで、「娼婦」や「ブルジョワ」をテーマにした韻文詩2編を分析、検討してきたが、ランボーにとって重要なテーマである「キリスト教」に関してはまだ分析できていない。次に、初期韻文詩に見られる医学用語とキリスト教の関係を考察しよう。

そして、誰もが物乞いめいた愚かしい信仰をだらだらと垂れ流し、
イエスに切りのない泣き言を投げかけるが、
イエスは鉛色のステンドグラスに黄色く染まり、高いところで夢見心地だ、
意地悪な痩せた奴たち、また太鼓腹の性悪たちから離れて、

肉と黴臭い布から離れて、
不快な動作で行われる衰弱しきった陰鬱な笑劇だ
さて、お祈りが選りすぐった表現で花を咲かせ
神秘性が差し迫った調子を帯びてくる

教会の中央部分で太陽が滅びる時、平凡な
絹の襞で身を飾り、緑色の笑みを浮かべた、気品ある地区からきたご婦人方が
おお、イエス様、肝臓の病を患った者たちが
黄ばんだ長い指を聖水盤に口付けさせるのだ。[8)]

引用部は韻文詩「教会の貧者たち」を締めくくる最後の3詩節で、クライマックスとなる部分である。この詩編では、これまでに見てきた詩編とは異なり、特定の人物を描写するというよりもむしろ、教会の日常風景を描写している。病名の使用頻度に関しては、他の詩編と比べると少ないのであるが、初期ランボーの詩作における技法を知る上で重要な詩編と考えることができる。

まず、これまで見てきたように、医学用語として「衰弱しきった（prostrée）」が使用されている。教会内で執り行われる一連の行為を「笑劇」に例え、それを「衰弱しきった」と表現することで、ある種の擬人化を読み取ることができる。さらに、神聖で厳かな空間であるはずの教会が、生彩の欠けた「鉛色のステンドグラス（le vitrail livide）」に飾られ、そして祭壇には「黴臭い布（étoffes moisies）」が使用されることで、不衛生な空間に置き換えられている。このような病的な空間はそこに描かれる人物描写にも反映されている。注目に値するのは「肝臓の病を患った」「ご婦人方」である。「黄ばんだ」と書かれているように、「ご婦人方」には「肝臓の病」による黄疸の症状が現れていると考えることができる[9)]。そして、この詩編ではイエス自身も「ご婦人方」と同様に「黄色く染まって」いるのである。つまり、教会に居るのは病を患った「人間化」されたイエスなのである。さらに、黄色という色の別の含意を考える必要があるだろう。スティーヴ・マーフィは初期韻文詩に含まれるソネ「タルチュフ懲罰」で、タルチュフが黄色い肌をしていることについて、この色が黄疸を表すだけでなく、宗教画ではキリストを裏切ったユダが黄色い服を着て描かれることが多く、「黄色い肌のタルチュフ」にユダのイメージが重ね合わされていることを指摘している[10)]。この解釈は「教会の貧者たち」にも当てはめることができよう。つまり、「貧者たち」に関心を示すことなく、教会の高見で「夢見心地」の「イエス」と「ご婦人方」に、キリストを裏切ったことで有名なユダの姿が投影されているのである。最終詩行の「肝臓を患った者たちが／黄ばんだ長い指を聖水盤に口付けさせるのだ」を解釈する際には注意が必要である。字

義通りに取れば「教会に置かれている聖水盤に指を浸す」と解釈することができる。しかし、19世紀の言語学者アルフレッド・デルヴォーによって編纂された『現代隠語辞典』によれば、「指（doigt）」の項目に「男性性器」、そして「聖水盤（bénitier）」に「女性性器」としての定義があり、この語義を無視することはできない[11)]。また、動詞「口づけをする（baiser）」が使用されることによって、最終行にエロチックなイメージが織り込まれる。つまり「聖水盤に指を口付けさせる」という表現に、「聖水盤に指を浸す」という宗教的行為と男女間の「性行為」とがダブルイメージのように重なり合っているのである。つまり、病を患い不気味な「笑みを浮かべた」「ご婦人方」は祈りを捧げるために教会に来るのであるが、それは熱心な信仰心によるものではなく、当時の「ご婦人方」が潜在的に有している不敬虔な態度を描いていると言うことができよう。

2. 初期ランボー作品に見られるカリカチュアの技法

ここまで、ランボーの韻文詩に現れる科学用語、とりわけ医学用語や解剖学用語を用いたグロテスクな人物描写を見てきたが、ここでは、それが何に由来するのかを考えていきたい。この特徴を考えるにあたって、ランボーとカリカチュアの関係を考慮する必要があるだろう[12)]。というのも、カリカチュア作家が描き出す風刺画の特徴にグロテスクさを挙げることができ、それがカリカチュアの技法の一つとして重要な地位を占めていたからである。つまり、これまでに分析したランボーの詩作品に現れる人物がカリカチュア画のように描かれていることは十分に考えられるだろう[13)]。

第二帝政末期になると、厳しく取り締まられていた出版に関する検閲制度が緩和され、ナポレオン3世やその取り巻きを標的にした膨大な量のカリカチュアが現れた。そしてグロテスクに人物を描くという技法は、その対象になる人物を揶揄することに有効な手段であった。

まずカリカチュアの技法において、当時フランスで流行しバルザックを始

めとする作家にも影響を与えた「観相学」の影響を忘れることはできない。これは、人口が急増する都市部において、相手の外見的特徴からその人物の内面を容易に見極めることに有効であり、人物描写を重要視するカリカチュア作家にも影響を与えたのである。ランボーの詩でカリカチュア画に見られるこの一例を見てみよう。

そして、誰もが物乞いめいた愚かしい信仰をだらだらと垂れ流し、
イエスに切りのない泣き言を投げかけるが、
イエスは鉛色のステンドグラスに黄色く染まり、高いところで夢見心地だ、
意地悪な痩せた奴たち、また太鼓腹の性悪たちから離れて[14)]

これは、先に引用した「教会の貧者たち」の一節である。ここで注目したいのは引用部第4行目、「意地悪な痩せた奴たち、また太鼓腹の性悪たち（des maigres mauvais et des méchants pansus）」である。観相学が人物の外見特徴からその内面を読み取ろうとするように、引用部では「意地悪な」性格をした「痩せた」人物と、「太鼓腹」をした「性悪」な人物が描かれ、外見的特徴がその人物の性格を描き出していると言うことができるのではなかろうか。さらに、この一行に置かれた品詞の順番に注目すると、「名詞（痩せた奴）」、「形容詞（意地悪な）」、「形容詞（性悪な）」、「名詞（太鼓腹）」と理解することが可能であり、つまりレトリックの一種である交差法（chiasme）を指摘することができる[15)]。そのため、読者の注意をこの一行に集中させることができ、他の詩行よりも目立たせることができるのである。

19世紀のカリカチュアに頻繁に現れるイメージが、別の詩編ではどのように現れているのかを見てみよう。引用部は韻文詩「皇帝の怒り」の冒頭部分である。

蒼白な顔をしたその男、花咲く芝生にそって

歩いている、黒い燕尾服を着て、葉巻をくわえ
蒼白な顔をしたその男は、チュイルリー宮の花々を思い返している
そして、時折その生彩の無い目が、燃えるような眼差しをもつ

というのも皇帝はこの二十年間の乱痴気騒ぎに酔っているからだ！
彼は次のように言う「私が自由を吹き消してやろう、
そっと慎重に、ろうそくの火を消すかのように！」
自由はよみがえった。彼は精根尽き果てた思いだ。[16)]

アンドレ・ギュイヨーが指摘するように、「その男」がナポレオン3世であることは間違いないだろう[17)]。「生彩の無い目」と言う表現は、カリカチュアにおいてナポレオン3世を風刺する常套手段であった。下線部分の「自由を吹き消す」や「ろうそくの火」を解釈するためには当時のカリカチュアの伝統を考える必要がある。19世紀のカリカチュアには「ろうそく」に灯った炎が「自由」を象徴する紋切型のイメージとして用いられ、それを当時の政治家が必死になって吹き消そうとしている場面が頻繁に描かれている。この「ろうそく」のイメージは、ナポレオン1世の帝政時代に流布したカリカチュアにも既に用いられ、そのことから当時の政治や教会、聖職者を風刺するための伝統的な手法であったと言うことができる。たとえば、「自由思想」を象徴する「ろうそく」を聖職者が吹き消そうという場面が描かれたり、第二帝政期には当時の政治家が、「言論の自由」を表象する「ろうそく」の炎を「ろうそく消し（éteignoir）」を使って消そうとしたりする場面が、カリカチュア作家によってしばしば描かれた[18)]。

ここで、「皇帝の怒り」に戻ってみよう。19世紀のカリカチュアにしばしば取り入れられた「炎を（吹き）消す」という行為は、「ろうそくの火を消すかのように、自由を吹き消してやろう」と語る「その男」の行為と共通点があるのが分かる。つまり詩人は、「自由が蘇った」のにも関わらず過去の栄華に今もなお酔いしれているナポレオン3世をカリカチュアの技法を用い

て描き出しているのである。

このように、初期ランボーにおけるカリカチュアの影響は大きく、詩の読解において欠かすことができない要素であることがわかる。

3. ランボーと19世紀フランス社会

19世紀フランスでは、飛躍的に科学技術が進歩したことで人々の生活は大きく変化させられるのであるが、それは医学の分野でも同様である。ルイ・パストゥールによって細菌学が、そして1868年にクロード・ベルナールが『実験医学研究序説』を発表し生理学の分野が発展し、19世紀は病気との戦い、予防の道を大きく切り開いた時代ということができるだろう。つまり、公衆衛生に大きな関心を持つようになったフランス社会の傾向が、ランボーの詩作品にも現れていると考えることができるのではなかろうか。しかし、ランボーが描き出す人物は病を患い、グロテスクな様相を呈しているのである。そのため、詩の読者はそこに描かれる病的な人々の姿に驚かされるのである。まず、「水の中から立ち現れるヴィーナス」では、性病を患った「娼婦」が描き出される。もちろんランボーが「娼婦」を選んだのには、19世紀フランス文学に「娼婦」がしばしば取り上げられるという傾向に合致するものであるが、詩の語り手は「娼婦」の体を観察する法医学者を思わせる人物であり、読者にその人物を擬似的に体験させているのである。さらに性病という当時恐れられていたテーマを詩に用いるだけでなく、「娼婦」のグロテスクな体つきは、当時の「娼婦」を取り巻くフランス社会を風刺したカリカチュアとして描かれている。この傾向は、例に挙げた他の詩編にも当てはめることができる。「座った奴ら」ではブルジョワを、そして「教会の貧者たち」では信仰心にかける「気品ある地区のご婦人たち」だけでなく、「貧者」に目もくれようとしない「イエス」をも風刺の対象とし、権威が失墜し退廃していくカトリック教会を風刺しているのである。本論では、分析対象として初期韻文詩にしぼり、ランボーが愛用する医学・解剖学用

語、そしてカリカチュア画の技法に焦点を絞り考察してきた。これらの詩編は、第二帝政末期からパリ・コミューンを経て第三共和制へと至る、激動の社会に生きる人々を標的にした、ランボーの辛辣な視線によって描き出されたカリカチュアなのである。

［注］

1） 本研究は、大阪大学文学研究科「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム（日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」）による支援を得た。

2） ランボーと19世紀科学の関係に関する研究は次の研究書に詳しい。中地義和、『ランボー　自画像の詩学』、岩波書店、2005年、pp.131-168.

3） Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie par André Guyaux, avec la collaboration d'Aurélia Cervoni, Gallimard, « Bibl. de la Pléiade », 2009, p.378. ランボーの詩作品については全てこの版を使用する。以下、*O.C.* と略す。引用の下線は全て筆者による。「バショ」とは大学入学資格試験「バカロレア」を意味する俗称である。

4） *O.C.*p.65.「水の中から立ち現れるヴィーナス」に関して緻密な分析を行った次の論文を参照。Steve Murphy, *Le premier Rimbaud ou l'apprentissage de la subversion*, CNRS/Presses universitaires de Lyon. 1990, pp.189-218.

5） 19世紀の娼婦と娼婦を取り囲む環境に関しては、次の論考を参照。*Alexandre Parent-Duchâtelet*, *La prostitution à Paris au XIXe siècle*, Texte présenté et annoté par Alain Corbin, Points, 2008. 詩と19世紀法医学の関係については、次の論文を参照。寺本成彦、「性倒錯と詩 ―法医学者タルデューの読者、ロートレアモン―」、『シュンポシオン 高岡幸一教授退職記念論文集』、朝日出版社、2006年、p.425-434。

6） *O.C.* p.155.

7） ランボーが好んでいた19世紀カリカチュア作家アルフレッド・ル・プティは、1871年に *Fleurs, fruits et légumes du jours* という風刺画集を出版している。この本では第二帝政期の政治家が花や果物、野菜の姿をして滑稽に、またグロテスクに描かれている。また、この画集はフランス国立図書館『ガリカ』で閲覧することができる。
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k5698646g.r=Alfred+le+petit+fleurs+fruits.langFR

8） *O.C.* p.133.

9） 「肝臓の病」を患って「黄疸」の症状が現れている人物は、ソネ「タルチュフ懲罰」にも描かれている。「ある日、あいつは出て行った。恐ろしいほど優しげに、／黄色くなって、歯の抜け落ちた口からは信心の涎を垂らしながら」。*O.C.* p. 93.

10） Steve Murphy et George Kliebenstein, *Rimbaud Poésies, Une saison en enfer*, édition

atlande, 2009, p.164.

11）Alfred Delvau, *Dictionnaire érotique modernes* ([Reprod.]), 1850. « Bénitier » と « Doigt » の各項目を参照。

12）ランボーとカリカチュアの関係に関して、次の論文、研究書を参照。François Caradec, « Rimbaud, lecteur de Boquillon (suite) », *Parade sauvage*, 6, 1989, pp.67-73. Steve Murphy, *Rimbaud et la ménagerie impériale*, Presses universitaires de Lyon, 1991.

13）ボードレールは、19世紀カリカチュア作家オノレ・ドーミエに関する論考の中で次のような言葉を残している。「お偉いがたのすべてが様々にグロテスクな衣装をへんてこにまとって行進するのだ。」Baudelaire, *Œuvres complètes*, II, Texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, p549. 下線は筆者による。

14）*O.C.* p.133.

15）交差法とはレトリックの一つであり、同等関係にある2つの語群のうち後の語群の順序を前の語群のそれとは逆に配置する方法。（例）Il faut manger pour vivre et non pas vivre pour manger.「食べるために生きるのではなく、生きるために食べなければならない。」

16）*O.C.* p.91.

17）*O.C.* p.835.

18）例えば19世紀カリカチュア作家オノレ・ドーミエは« Les Moucherons politiques »というタイトルのカリカチュアを1850年に発表している。そこでは当時の政治家たちが、二月革命を象徴するろうそくを吹き消そうとしたり、ろうそく消しを使ってその炎を消そうと試みたりする場面が描かれている。次のリンクを参照。
http://expositions.bnf.fr/daumier/grand/085.htm

［参考文献］

・アルチュール・ランボー、詩の日本語訳
ランボー全集、平井啓之、湯浅博雄、中地義和、川那部保明訳、青土社、2006年。

・19世紀カリカチュアに関する文献
La caricature entre République et censure : l'imagerie satirique en France de 1830 à 1880, un discours de résistance ?, Presses universitaires de Lyon, 1996.
林田遼右、カリカチュアの世紀、白水社、1998年。

（大学院博士後期課程学生）

RÉSUMÉ

Le procédé caricatural chez Arthur Rimbaud:
Autour des vocabulaires scientifiques

Kenji Yamamoto

La science a pris un essor considérable au cours du XIXe siècle et a influencé beaucoup d'écrivains et de poètes de cette époque. Arthur Rimbaud a notamment été inspiré par la « vulgarisation scientifique ». Dans cet article, nous explorerons la relation entre le poète et la science du XIXe siècle en analysant ses premiers poèmes en vers.

Lorsque l'on lit certains poèmes en vers d'Arthur Rimbaud, le vocable scientifique attire l'attention. Ce sont souvent des termes concernant l'anatomie, la maladie et la médecine. Il a tendance à dépeindre des personnages maladifs et grotesques. Mais pourquoi a-t-il tenté de décrire tels personnages ?

Non seulement la science, mais aussi la caricature se répandaient énormément dans la vie quotidienne durant le Second Empire. Selon certains témoignages de son ami Delahaye, Rimbaud était grand amateur de la caricature contemporaine. Quand on analyse des textes de Rimbaud, on peut souvent noter le procédé que les caricaturistes employaient, c'est-a-dire que les personnages sont décrits à la façon grotesque. On ne peut pas oublier non plus la physionomie qui était très à la mode à cette époque.

Dans le présent article, on analyse trois poèmes de Rimbaud qui prennent une prostituée, des bourgeois et l'Église pour cible. Le poète critique ces trois types sociaux en employant des mots scientifiques. Le but de Rimbaud est de tourner des gens contemporains en dérision avec des images grotesques. Pour le premier Rimbaud, on peut donc déduire à travers des analyses des textes que le procédé caricatural et des vocabulaires scientifiques occupent une place importante.